

に気をつけていただきたい。フランス語の辞書の場合と同様に見出し語の発音しか聞くことができず、さらに辞書の発音を聞いても平音、激音、濃音の区別が分かりにくいだけでなく、次のような事情があるため、あくまで参考程度にとどめるべきで、それを頼りにすべきではない。韓国語は音の変化がきわめて激しい言語で、たとえば、体言の場合には助詞との間でのリエゾン（連音）が起こったり、用言の場合には語幹と語尾との間で音の変化が起こったり、語幹そのものが変化したり、その他さまざまな音の変化がある。したがって、見出し語の発音を聞くだけではほとんど役に立たない。文字と音との関係をしっかり理解し、音の変化に慣れることが重要で、この点では電子辞書の発音はほとんど役立ってくれないのである。

なお、初級の韓国語学習者にとっては、紙のものよりも電子辞書のほうが使いやすい面があるかもしれない。というのは、紙の韓日辞典を使う場合、辞書でのハングルの配列順序が頭に入っていないと調べるのに時間がかかるが（もっとも、四苦八苦しているうちに慣れて、さっと調べられるようになるが）、電子辞書の場合にはキーボード（スクリーン・キーボード）を見ながら、ハングルを打ち込んでいけば、辞書でのハングルの配列順序を知らなくても調べることができるからである。とはいえ、辞書での配列順序を知らないと、電子辞書に入っていない辞書を調べなければならなくなったような場合に困ることになるから、覚えなければならないが。

以上、電子辞書を使うにあたって気をつけるべきことをざっと書いた。電子辞書はうまく使いこなせば非常に便利で役立つが、使い方を誤ると、学習にとってマイナスになりかねない危険をも持っている。繰り返し、コンパクトさ、携帯性が電子辞書の最大の長所であるが、この長所ゆえに見通しの悪さという重大な欠点を免れることができないのである。もしお金に余裕があれば、家では紙の辞書を使い、持ち運びには電子辞書を利用するというのが理想的な使い方である。

2人の老人、中国周遊

対外経済貿易大学教授・愛知大学客員教授
賈 保華

昔から中国には「読万卷書、行万里路」（万卷の本を読み、万里の道を行く）という諺がある。読書と旅行が互いを補完しあい、本から得た知識と実社会から得た経験をもとに、人生を充実させる、という意味である。そして、本ばかり読んでいても駄目だ、外の社会を見なきゃ、という意味も含まれる。

しかし、大多数の人にとって、旅行するにはやはりお金と時間が必要である。特に長距離と長期間の旅行なら、それが必須条件となる。しかし、最近中国では2人の年配者が大したお金も使わず、自転車や徒歩で全国一周という記録を作った。

まず、1人目は甘肅省蘭州市の64歳の男性、蘇徳祥さん。甘肅新聞網10月25日の報道によると、に蘇さんは全国22の省市にわたる自転車旅行を終え、1,000以上の郵便スタンプが押された記念帳と10万字におよぶ旅行記を持って、9月25日蘭州市に戻った。中国の自転車旅行では7万里（＝3.5万キロ）の新記録だという。

停年前、蘇さんは同市のある会社の幹部であった。若いときから全国周遊の願いを持っていたが、仕事が忙しく、なかなか暇が無かった。

停年後、かれは全国旅行の準備に取りかかり、2004年4月12日、一台の自転車で蘭州から夢の旅へ出発した。2005年9月までの18ヶ月の間に、彼は人気が無く寂しいゴビ、砂漠、草原も歩けば、賑やかな沿海都市も観光した。この旅行では合わせて22の省、市と自治区を周り、ほぼ2万円を使った。

天候不順などの理由で旅を一旦中止し、家に帰った蘇さんは、どうしても気が済まず、残った地域へぜひ行ってみたいと思った。そして、今年の4月から彼は2回目の旅に出た。蘭州を離れ、まず前回行かなかった内モンゴルに進出し、次に東北三省を横断して、河北省と河南省へ南下、それから甘粛省に帰るというコース。台湾を除けば、今回と前回を合わせて、ほぼ全国周遊の夢が実現した。蘇さんによると、途中、もちろんけがもしたし、危険なめにもあい、今その場面を話すだけでも、身がすくむという。ただし、これらの苦しみはすべて価値のあることであり、「精神的な楽しみが一番重要である」と、蘇さんは満足そうに語った。

面白いことに蘇さんが特別な例外ではなく、もう一人のお年寄りももっとすごい旅の記録をつづった。江蘇省徐州市の「都市晨报」10月20日の記事によると、それは76歳の殷朋傑さんである。

殷さんはいままで数十年の間に15万キロを歩き、中国の2,000以上の名所旧跡と80以上の港や国境地帯を回った。と同時に、140万字の記録と1,000枚以上の写真を撮った。最近、それらの資料に基づき、60万字の旅行記（上・下）を出版した。

その上巻の目次を見れば、こんな内容がある。例えば、香港マカオ9日間隨筆、廬山を上り浙江省江西省に転じ杭州蘇州の徘徊、中州（河南省旧称）の旅、東北樹海ドキュメント、華東5省1市散策、三峡万里風土録、東南沿海隨筆、張家界から雲南行きビルマ国境の後ベトナムへ、東北国境印象、自転車で中原（華北平野）3,000里長駆、海南島の天涯海角（天地の果て）など。

その下巻には黄土高原、青海チベット旅行記、天山南北とタクラマカン砂漠などの内容が含まれる。

「旅との縁」と言うと、殷さんはこう語った。小学校時代、鉄道労働者の子女向けの小学校だったので、毎年学校の旅行があり、しかも列車の切符はただだった。その時から現在までに、台湾以外の全国の33の省市自治区をまわった。いつも簡単な背嚢を背負って1人で出かけるので、占い師

とか薬草の行商ではないかとしばしば聞かれたが、かれはいつも笑って弁解しなかった。途中、遭遇した困難や危険などはもう言葉で言えないほど多かった。泥棒に「ご愛顧」されたことは言うまでもなく、ひどい場合、命を落としそうな事件でさえもあった。

まだ鉄道がなかった2000年のチベットに、69歳の殷さんは子供に遺書を残し、単身旅行をした。青海省のガルム（格爾木）でチベットに行く前の旅行者定例身体検査を受けたが、医者らは無理だとの診断意見を述べた。つまり、殷さんは25年の高血圧と20年来の心臓病持ちだった。しかし、折角のチャンスだと思った殷さんは、医者意見を聞かず、酸素ボンベを背負って、救心薬を持参し、バスで崑崙山脈を越えて、首府ラサ市に挺身した。そこで2週間の観光をした。

中国には「天馬行空、独往独来」（天馬は空を翔るとき、常に単独である）という言葉もあるが、殷さんはこの風格を持つ。つまり、ツアーに入らず、自由自在の旅が好き。だから、万里長城の西端の嘉峪関の城楼で1つのレンガを2時間じっくり見つめたり、新疆ウイグル自治区の火災山で半日ぼうっとしたりできる。歩ける場合は決して車や船に乗らず、山を上る場合はロープウェイを利用しない。これこそ、名所旧跡の方位、規模と特徴が分かると殷さんの経験談。また、いままで殷さんは長いときで2ヶ月、短い場合4、5日間で旅をする。往復の道程は平均1万キロくらい。自転車の利用はたびたびあるという。

殷さんは若いとき、北京気象学校を卒業したが、文学の素養も厚く、140万字の記録をもとにして、この上下2冊からなる旅行記を出版した。

さて、孤独な老齡の旅人の姿を想像しながら、次のことを考えた。いまの時代、技術の進歩によって、生活が大変便利になると同時に、人間と自然との距離も遠くなった。また、「時間は金なり」という市場メカニズムの至上命令、ゆっくり、のんびりした生活との断絶、物の氾濫と心の空虚さ、高度成長と環境破壊、自然との疎外および人間同士の疎外など…。「現代病」とも言える「患者」

が一体どれくらいあるかは分からないが、毎日毎秒増えていることは間違いないであろう。その特効薬は恐らくないが、旅を1つの選択肢として試したらどうかと薦めたい。短期間でもいいから、大自然の懷の中で、美と醜、善と悪、生と死、愛と憎、恒久と瞬間、真実と幻想、古代と現代、現在と将来などなど、もう一度吟味してみよう。大自然に対座し、一人ぼっちで「感触」し、感動し、感慨し、感激し、さらに感泣してみよう。

甘肅新聞網 (<http://www.gs.chinanews.com.cn/news/2006-10-25/1/49484.html>)

「都市晨报」10月20日 (http://www.tynews.com.cn/shehuifazhi/2006-10/20/content_2662770.htm)

英国の方言 リヴァプール編

経営学部
安藤 聡

リヴァプール方言のことを「スカウス」(Scouse)という。スカウスとは元来は、リヴァプール界隈で昔から食されている鍋料理のことである。ジャガイモとタマネギとニンジンと牛肉あるいは羊肉、さもなくばコーンビーフを煮込んだもので、アイルランドのアイリッシュ・シチューと似ているが、いずれも貧しい労働者の日常的なメニューである。その「スカウス」が転じてリヴァプール市民を指すようになり(『OED』に掲載されているこの用例のもっとも古いものは一九四五年)、さらに転じてリヴァプール方言を意味するようになったのだった。『OED』には一九六三年六月三日付けの『ガーディアン』の記事がこの意味でのもっとも古い用例として引用されているが、この記事の内

容は次のようなものである。「このロックグループはリヴァプールを一夜にしてエンターテインメント界で注目される場所に変えてしまった。このグループの二枚のレコードが発売されてから、ロンドンの業界人にとってはスカウスの単語をいくつか覚えておくことが不可欠になった」。『OED』にはこの部分しか引用されていないので詳しい文脈は不明だが、「このロックグループ」というのは多分ビートルズのことであろう。なお、現在では「リヴァプール市民」のことは「スカウス」というよりも「リヴァパドリアン」(Liverpudlians)、あるいはそれを略して「パドリアン」という方が普通である。これは 'Liverpool' の 'pool' の部分をわざわざ 'puddle' に変えて、さらに人を表す接尾辞 '-ian' を付けて出来た俗語だ。英語で 'pool' といえば「水たまり」や「小さな池」を指すが、リヴァプールの街は混沌としているので 'puddle' (泥沼)の方が似つかわしい、ということで部外者が嘲笑的に、あるいは関係者が自虐的に名付けたのであろう。

リヴァプールはマーズイー川の河口に位置する港町である。十八世紀以降とくに米国との貿易で栄えたが、そのため一九五〇年代から六〇年代にかけては、米国文化の入口としての機能を持っていた。初期のビートルズは米国の黒人音楽(とりわけリズム・アンド・ブルースなど)の影響を濃厚に受けていたが、これは彼らがリヴァプールで生まれ育ち、また一時期をドイツの同様な機能を持つ港町ハンブルクで過ごしたとと密接に関係している。またリヴァプールはアイリッシュ海を挟んでアイルランドと向かい合っているが、このこともこの街の歴史を考える上で極めて重要である。十九世紀にはアイルランドから大量の人口流入があり、現在でもアイルランド系の住民(すなわちカトリック教徒)が多い。ビートルズの四人のうち三人までがアイルランド系であり、それ故に彼らが書く詩にはアイルランド的な機知とユーモアが散見される。

このような歴史的経緯から、スカウスすなわちリヴァプール方言はアイルランド英語と米語の影